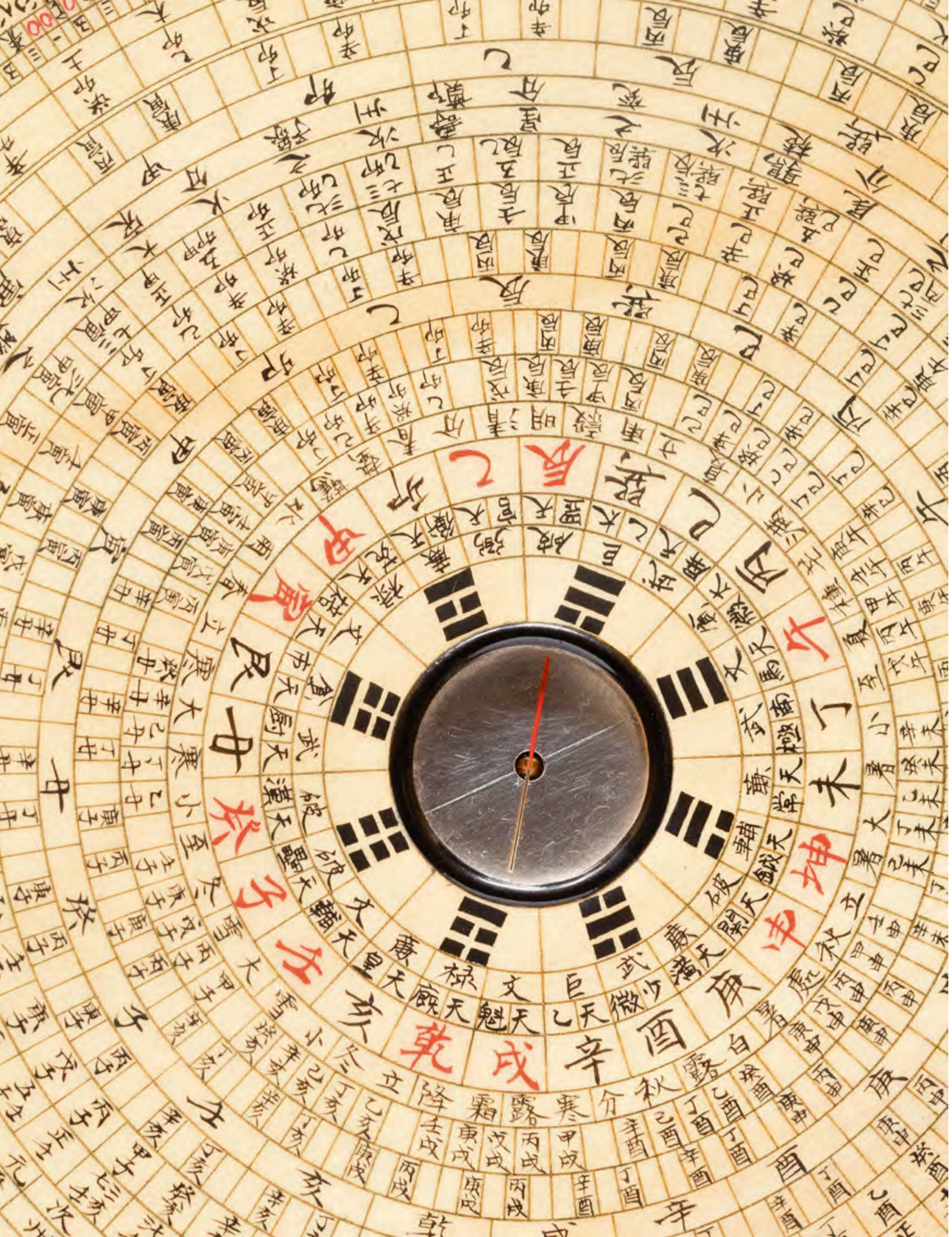

文 ベン・ヒューズ
写真 アンドリュー・ロワット

調和を占う

精神性の深い帳に包まれながら、数世紀にわたって
発展を遂げてきた風水が、中国で再び脚光を浴びている。
風水鑑定では羅盤が重要な役割を果たすが、その特級品を
代々つくり継いでいる一族に話を聞いた。

中国の歴史の大半において、安徽省は裕福さと繁栄を謳歌してきたが、今日その面影はない。唐の時代に隆盛を極めた中国は、当時、特にこの南部の地域からことさらに商業が発達した。壮大な風景に囲まれ、多様な市民文化が開花した安徽省は、芸術家、知識人、商人が集まる一大拠点となり、万安という町に、ある興味深い産業が根づいた。呉家は、この町で300年近く、風水鑑定に用いられる精密器具をつくり続けている。初代呉魯衡の名を冠した店は、板張りの応接室や、中庭、自然光が入る吹き抜けの天井を備えた安徽省独特の伝統家屋で、現在も営業中だ。当代の呉兆光は、20のチームを束ねながら、世界中で用いられる風水の道具を製作している。

風水の歴史は複雑で、さまざまな議論がなされている。哲学から精神世界、医学、数秘術、天体物理、地質学にまでまたがる風水は、多くの建築家たちの支持を得ているのだ。古代ローマの土木技師で西洋建築の礎とされるウィトルウィウスの著書にも、風水鑑定と酷似した記述が見られるが、これは驚くにあたらない。風水の正式な法則を知らなくても、適切な配慮と正確さによって調和が保たれた空間は心地よく感じられる。この店がまさにそうだ。話を聞くために腰を下ろすと、開け放たれた扉や窓から、涼しく新鮮な空気が流れ込み、射し込む光は明るく澄んではいるが、眩し過ぎない。周囲の物音に溶け込んだ鳥の鳴き声が、耳に心地よく響き、穏やかさに包まれている。この建物は、そうしたことに特に注意が払われてつくられているのだが、建築された17世紀当時、この通りに面した家はみな、風水の理に従って設計されていたのだろう。近くには、伝統的な集落の面影を残す古い村落がふたつある。その落ち着いた静かな雰囲気は格別で、2000年にユネスコの世界遺産に登録された。登録の理由に風水は含まれていないが、「リズミカルな空間の変化……静穏な路地……すべてに人と自然の共存、一体感、調和が感じられる」と称えられている。

呉兆光は、2014年に父、水森が他界した後、家業を継いだ。着こなしもお洒落な33歳の兆光は、奥義を極めた人物というイメージとは少々異なるが、紛れもなく事業家の血を受け継いでいる。1980年代に訪れた経済的・文化的改革の時代以降に生まれた若い中国人の多くがそうであるように、彼もまた現代的展望と過去への敬意の両方を持ちあわせている。昔ながらの考え方は、中国人の暮らしのさまざまな側面、とりわけ風水の世界を特徴づけている。例えば、新旧の暦の違いから、自分の干支を見極めるのにすら、混乱をきたすことがあるが、それを解決してくれるのが風水の道具や基準なのだ。

兆光が見習いとして初めて工房に入り、父の仕事を見たのは3歳の時である。厳しい時代背景のなか、家業にとって苦難の時が忍び寄ってきていた。文化革命の間、風水は迷信的、ブルジョア的なものとして糾弾された。呉家の工房と店舗は接収され、兆光の父は炭鉱に送られ、強制労働を課せられた。1980年代の改革期にようやく帰郷を許された一家は、ひっそりと家業を再開した。不思議なことに、中国では現在も、風水は非合法とされているのだが、呉家の風水羅盤製作事業などは、工芸遺産に貢献するものとして称揚されているのだ。

兆光は、兵役に就いた数年を除いて、常に風水羅盤工房と共に歩んできたが、工房を離れた数年間に、家業の経営を意識するようになったという。風水学は非常に複雑で、真の達人は一生学び続けるものだ、という考えから、彼は、風水の専門家を気取る素振りすら見せない。これは、羅盤の製作にもあてはまる。一見シンプルなようで、実は長い年月をかけて無数の改良が重ねられているのだ。羅盤は、歴史的遺物であるだけではなく、その技術や用法は古代から進化し続けているのである。

中国で初めて用いられたコンパスは天然磁石で、一点でバランスを保ちながら回転するようにスプーン形に彫られていた。これを平らな場所で回転させ、方角を調べたのだ。コンパスの歴史は紀元前200年頃まで遡り、主に宗教や儀式の道具として使われていた。航海に使われるようになるのは、それから1000年以上経った宋代のことだ。西洋のコンパスは磁北を指すが、中国のコンパスは南を指すことから、「指南針」と呼ばれる。

羅盤という言葉には、「ふるい分ける」または「集める」ための道具という意味がある。その根本には、個々の要素が相互に関連しながら宇宙を構成している、という考え方があり、それはまさに、風水師が依頼者の要望に応じて、時間・場所・自然のさまざまな要素の完璧な配置を決定する方法なのである。航海に用いられる羅針盤は、方角という単一の情報を伝えるが、風水羅盤は、無数の要素の意味を解き明かす。兆光は、それを辞書にたとえる。ただ調べるだけでは、いくつもの答えが導き出されてしまう。それが何を語りかけているのか知るためには、深い文脈的知識が求められるのだ。

呉家の羅盤は直径約15センチから40センチの木製の円盤で、幾重もの同心円が中央の小さなくぼみへと連なっている。このくぼみは「天池」と呼ばれる羅盤の中心部で、反射面の上で磁針が微妙なバランスを保っている。周囲の環境に関する情報を示すこの部分で、呉家の羅盤は、競合製品を大きく引き離している。安徽省の土産物店では、似たような羅盤が盛んに売られているが、呉家の羅盤はデザインと構造に特色がある。完成までは約3ヵ月。第一段階は木材選びで、イチョウか虎斑模様が美しいツゲの一種が用いられる。薄色の木材を成形し、表面の色みがフラットでハイコントラストになるまで磨き上げる。そこに繊細な線が刻まれ、一点の滲みもなく文字が書き込まれる。この工程では、乾燥、塗油、そして乾燥させた特別な草を用いた研磨という一連の作業を20回以上繰り返す。

呉家の人々は、代々改良を重ねてきた。兆光も例外ではない。

［前見開きページ］
（左）美しい風水羅盤。
見方さえ知っていれば、
情報はここにある。中央の
天池の外側に、易経の八卦を
表す環があり、さらにその
外側に、大地・天・人を表す
3つの盤や、さまざまな
要素を表す層が幾重にも
取り巻いている。
（右）若き当主、呉兆光。
［当見開きページ］
（左）築400年の呉家の門構え。
段上に子猫が座っている。
近隣の建設工事によって
建物の風水に影響が及んだため、
この重厚な玄関は動かされた。
（右、上から下へ）羅盤の
製作に用いられる道具の一部。
羅盤の表面は、草を乾燥させた
特殊な研磨材で磨き上げられる。
文字は手仕事で書き込まれる。

風水学は非常に複雑で、
真の達人は一生学び
続けるものだ、という考えから、
彼は、風水の専門家を気取る
素振りすら見せない。

最新の成果は、磁針を取りつける重要な最終工程に関するもので、これは呉家の当主が密室で行う慣わしになっている。磁針の支点をより精緻にし、盤面が完全に水平でなくても正確に作動するようにする。針に磁性を帯びさせる工程も、秘伝とされている。丸ひと月の間、約7センチ×12センチの石の上に置いておくのだが、この石は二代目の当主が手に入れたもので、希少な隕石と考えられている。この貴重な石は、気候の影響で性質が変わってしまうことを恐れて、人目に触れないように保管されている。これは一家にとって非常に大切なもので、四代目の呉肇瑞は、石を守るために命を落としたほどである。太平天国の乱末期の1861年、安徽省の大半は侵略軍に占領されていた。略奪に遭った呉肇瑞は、金を隠していると疑われ、殺害されたが、「お宝」が岩石だと知ると、賊はそれを捨てていった。石は、後に家族によって取り戻された。

近年は、呉家の家屋も工房も静けさを取り戻しているが、これも風水が建物に及ぼす影響なのであろう。風水の奥深さに対する関心は再び高まり、建築家たちはこぞってそれを取り入れている。しかし落成後も、建物を支配する風水の要素は変化する。風水のバランスを保つためには、「メンテナンス」が必要だ。「町に新しい橋ができたので、2009年に家の出入口を動かしました」と、兆光は言う。確かに、400年以上前に設えられた重さ数トンもある御影石の出入口は、壁から5センチほどずれている。ここからも、一家の真剣さがうかがえる。

呉家の羅盤は香港、日本、台湾、米国をはじめ世界各地で評判を呼び、100万円を超す製品に長い順番待ちのリストができている。万事順調に見えるなか、唯一の心配は生産体制だ。他の多くの伝統工芸品と同じように、長く働く意思のある若い働き手が、なかなか見つからないのだ。

とはいえ、風水復活の勢いは力強く、また最近娘も授かった兆光は、需要や家門の存続に頭を悩ませる必要はなさそうだ。✥

「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」(patek.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。

［当ページ］
（上から）寺院のような
呉家の出入口。
磁針の基材を切り出す。
針を支える基部をつくる。
［前ページ］
風水師の道具――コンパス、
日時計、定規。
羅盤が示す情報を基に、
風水は、建物とそれを使う人、
そして外界を調和させる感覚を
会得する方法を示す。